

まえがき

田 中 雅 一

2001年9月の同時多発テロとそれに続く米軍のアフガン侵攻、イラク戦争、また横須賀からの米空母の出航、自衛艦のインド洋派遣、そして有事立法の審議と続く一連のできごとは、戦争や軍隊を無視して現代社会について語ることはできないことをわれわれに教えている。そんな現状で、われわれはいったいどのくらい軍隊について知っているかと断言できるだろうか。軍隊について知るとは、なにも軍事力や国際情勢、関連政策や法案に通じているということの意味するのではない。軍隊の真の姿とは、なにも武器の数や組織体制図や指導者のプロフィール、あるいは最高機密事項の暴露によって表されるのではない。重要なことは、具体的な形をとってわれわれの目に見える平時の軍隊のありかたではないだろうか。軍隊の大半を構成する兵士たちもまたひとりの生活者としてわれわれとともに一般的な暮らしを営んでいる。このような生活者としての兵士、市民社会に生きる兵士のあり方こそ、いま理解が求められているのではないだろうか。

さらに言えば、いたずらに軍隊の存在を無視・非難・疎外し、紋切り型の軍隊像を強化するという状況を克服することこそ、現代日本の軍隊や戦争をめぐる一面的な議論の閉塞状態を脱する可能性がある。本特集においては従来の「軍事」研究に対して、新たな研究枠組みの提出をめざしたい。また直接ではないが、他国の軍隊を対象とする論文と併置することで、なかばタブー視されてきた自衛隊や在日米軍の研究に従来とは異なる視点から学術的な貢献をすることを期待したい。

本特集では、主としてアジア社会に焦点を絞り、各国の軍隊をそれが置かれている社会・文化的状況との関係で考察する。ここで取りあげる軍隊を取りまく社会・文化的状況とは、ジェンダー規範、地域社会（基地の街）との関係、外国に駐留する軍隊の場合はトランスナショナルな状況、軍隊・軍人の社会表象などである。本書でも基本的な問いは以下のようなものである。すなわち、軍隊は一般社会に比べてどの程度特殊なのか。そして、両者の関係はいかなるものなのか。軍隊は一般社会を忠実に反映しているのか、それ

とも逸脱しているのか。軍隊は一般社会にどのような影響を与えているのか。あるいは影響を受けているのか。本特集では日本（自衛隊と在日米軍）、中国、韓国、シンガポール、ブルネイ（英国軍）を取りあげ、以上の視点から文化人類学的、かつ歴史学的研究をまとめたのが本書である。

田中論文「軍隊の文化人類学的研究への視角——米軍の人種政策とトランスナショナルな性格をめぐって——」は、本プロジェクトの序論にあたるものであり、文化人類学の歴史的展開に照らして軍隊研究の意義を論じている。すなわち、文化人類学は、文明に対する未開、都市に対する農民と、その対象を拡大してきた。そして、今はより抽象的な「他者」が考察の対象になりつつある。それは、内なるマイノリティあるいはサバルタンの探求である。軍隊はある意味で、こうした内なる他者ととらえることも可能だが、サバルタンとは言えない。とくに在日米軍のような外国の軍隊についてはどうか。それは、かつての植民地における宗主国のコミュニティに近いものと考えべきであろう。つまり、軍隊研究とは周辺的存在に目を向けてきた文化人類学的まなざしそのものを相対化し、新たな可能性を示唆するものなのである。そして、本論では、まず米軍の人種政策を取りあげ、アメリカ社会と軍隊との関係について考察する。さらに、本論文ではグローバルな時代における人類学的研究の可能性を軍隊との関係で述べ、在日米軍のトランスナショナルな性格にも触れる。ここで言うトランスナショナルな性格とは、日本という国家の、地理的、法的な境界をいわば越境し、同時に基地のある地域とさまざまな形で接合する動きである。

以下に続く、宮西、高嶋、福浦、フリーシュトゥック論文は、米軍人の妻、中国の女性兵士、シンガポールの女性兵士、男性自衛官をそれぞれ取りあげ、ジェンダー規範をめぐる一般社会と軍隊との関係が共通テーマとなっている。それに続く田中論文は、従軍牧師に注目し、宗教をめぐる一般社会と軍隊との関係がテーマとなっている。

宮西論文「軍隊は彼女の家族なのか？——米軍人妻の実用的、制度的、生活誌的研究をめぐって——」は、米軍における男性兵士の配偶者（軍人妻）に関する文献レビューの試みである。上杉論文でも兵士の家族は重要なテーマである。トランスナショナリズムとの関係で言うなら、宮西論文では米兵と結婚した外国人女性（とくに日本人と韓国人）が取りあげられている。そして、米軍において配偶者ならびに家族がいかに取り扱われてきたのか、いかなるまなざしにさらされてきたのか、またどのような制度が存在するのかを明らかにしている。宮西は、レビューの対象となる文献を大きく3つに分ける。実用的研究、制度的研究、そして生活誌的研究である。実用的研究とは、軍人妻が軍人男性の任務遂行にとって重要な役割を果たすという前提で、彼女のなにかが問題であり、そ

れを解決するためにはどうすべきかを論じている一群の研究である。それらは、問題の設定上どうしても心理学的な傾向が強い。これに対し、制度的研究は軍人妻に働きかける制度やプログラムに注目する。最後の生活誌的研究は、妻の生活に注目し、夫をはじめとする妻を取りまく人々との人間関係に見られる葛藤を考察する。宮西が共感を懐いて紹介、考察しているのは、文化人類学的研究にも通じる第3の生活誌的研究である。しかし、これら3者に全体として認められるのは、軍人の妻を、軍隊生活から疎外され、軍にとってお荷物で、同時に犠牲となっているとみなす女性像である。それはまた、一般社会のジェンダー規範や軍人妻への差別を反映していると言える。その結果、軍人妻たちの主体的な生が十分に汲みとられていないこと、妻ひとりひとりへの視点は皆無であることが明らかとなった。宮西論文は、レビューではあるが、そこでの論点には彼女自身による横須賀での軍人妻との対話が反映されているに相違ない。宮西論文は、米軍の軍人妻を扱っているが、これに続く高嶋論文「近代中国における女性兵士の創出——武漢中央軍事政治学校女生隊——」と福浦論文「社会と軍隊の関係——『女性と軍隊』論文からみたシンガポール——」は、おのおの革命前の中国とシンガポールの女性兵士を扱っている。妻と女性兵士と、立場は異なるが、ともに軍隊のジェンダー規範を一般社会との関係で浮かび上がらせようとしていると言えよう。

高嶋論文は、1926年末に試験に合格し、武漢中央軍事政治学校で教育を受けた女性兵士（女生隊）の詳細な分析であり、彼女たちを取りまく社会環境が考察の対象になっている。そして、先行研究での議論を検討する形で、まず後世の粉飾を取りのぞき、女生隊の実像に迫ること、つぎに共産主義が女性兵士設立に与えた影響、最後にナショナリズムと保守的なジェンダー規範との相関において、どのような力学が女性兵士創出に作用したのかを探っている。限られた資料からではあるが、高嶋の分析はまさに女性兵士たちの個々の生に迫り、そこからマクロな文脈でもう一度女性兵士のあり方を問う作業である。高嶋論文は、女性兵士についてだけでなく、断髪をする兵士たちに注がれる一般民衆のまなざしにも注目している。

福浦論文は、シンガポールの軍隊と女性兵士たちの実態を、クアの『女性と軍隊』を紹介・検討することで考察している。そこで、クアが指摘しているのはフェミニナイゼーション、すなわち女性化の両義的意味である。ひとつは、軍隊という男性中心の仕事場に女性が進出することを意味する。これはしばしば労働市場の変化をめぐる使われる用法である。もうひとつは、軍隊で女性兵士は既存のジェンダー規範を侵犯しないように、むしろ女性であることを意識し、そのように振る舞うことが期待される。こうして、女性兵士自身が「女性化」される。これが第二の意味である。そして、第二の意味での女性化を促進しているのは、男性だけでなく女性の上司でもある。ここで重要なことは、

こうした問題をクアがインタビューを通じて明らかにしていることである。さらに、クアは軍隊の広告を資料に選ぶことで、軍隊の自己表象、そして女性兵士のイメージを探る。こうした試みは、他の国の軍隊にも有効であろう。

フリーシュトゥック論文「アヴァンギャルドとしての自衛隊——将来の軍隊における軍事化された男らしさ——」のテーマは女性兵士ではなく男性兵士である。そこでは、陸上自衛隊が、「ポストモダンな軍隊」としてこれからの軍隊の役割を先取りし、また兵士=戦士という等式が崩れつつあるという視点から、旧日本軍、米軍、そして一般社会の男性——とくにサラリーマン——との対比でどのようなアイデンティティを形成しているかが論じられている。本論でも、インタビューに加え、自衛隊の自己イメージを探るためにポスターや募集広告などの資料が分析の対象となっている。旧日本軍（皇軍）はその歴史的な連続性にもかかわらず、否定的に理解されており、反対に米兵は望ましい兵士として理想化されている。それゆえ、かれらと一緒に仕事をするのは誇りであり、同時にみずからの弱さや劣位を自覚することになる。サラリーマンは、男らしさの対極に位置するが、自衛官もまた幹部になると事務仕事が増えサラリーマン化する。他の論文との関係で言うと、サラリーマンという一般社会の典型的な男性が、自衛官男性の自己意識（アイデンティティ）に重要な役割を果たしていることが興味深い。自衛隊は孤立しているわけではないのである。また、米兵という、現代の日本が置かれている軍事・政治状況が自衛官のアイデンティティに影響を与えているということも、トランスナショナルな性格のひとつの現れと考えることが可能である。

田中論文「軍隊と宗教——米軍におけるチャプレン——」は、兵士たちの宗教生活の要となるチャプレン（従軍牧師）に着目して軍隊と一般社会との関係について考察している。インタビューや観察から明らかになったことは、チャプレンが置かれている媒介的立場である。チャプレンは、まず軍と宗教という2つの組織に属する。また、みずからが属する宗教や教派だけでなく、他の多くの宗教を信じる人々と接しなければならない。兵士だけでなく、日常的に接する同僚のチャプレンたちも宗教が異なる。戦時には、教派に関係なく部隊の兵士のめんどうを見なければならないのは一般にひとりのチャプレンである。こうしたことは、一般社会では考えられないことである。さらに、士官（将校）と下士官あるいは兵卒という米軍における階級的な差異を乗り越えることが可能なのもチャプレンである。かれらは士官であるが悩みを聞く相手を階級で分け隔てしてはいけない。チャプレンという制度は、一般社会で実践されている宗教活動を軍内部においても支障なく続行できるように導入された制度と言えるが、兵士すべての宗教実践に対応することは不可能である。その結果、上述したような越境的性格を帯びることになる。こうしたチャプレンの経験が一般社会での活動にどのような影響を与えるのかは不明で

あるが、軍隊と一般社会との関係を考えるうえできわめて示唆に富む。

最後の上杉論文「トランスナショナルな雇用政策と労働移民の生活戦略——香港返還にともなう英国陸軍グルカ旅団の雇用政策の変更——」は、これまでの5論文と趣を変え、一般社会との関係にとどまらず、よりトランスナショナルな文脈に位置する軍隊を考察しようとするもので、田中の序論で指摘したように、文化人類学の新たな可能性を示唆するものでもある。上杉論文では、トランスナショナルの文脈においてグルカ兵が直面するさまざまな問題について興味深い考察を行っている。上杉は「国境を越えて多様な紐帯や相互作用が形成・維持される過程ないし現象」とトランスナショナリズムを定義したうえで、人やモノだけではなく国家もまたトランスナショナルな性格を強めていることを指摘し、トランスナショナルな現象を分析するには、人をめぐるミクロな視点と国家の関与というマクロな視点が必要だと主張する。上杉が取りあげるのはグルカ兵をめぐる雇用政策の変遷である。グルカ兵は、インド独立後一部が英国に雇用されることになり、正規軍の一部を構成している。かれらの雇用政策はまさに国家を無視して論じることはできない。かれらは退役後英国での滞在が許されないこともあり、外国駐留においてもネパール文化やネパール語の環境維持が計られてきた。そして、駐留の間、一定期間同居が許されている子女の教育もネパールでの教育が主であった。しかし、香港返還に伴う政策の変化や本国での海外労働移民の増加・英語教育の高まり、さらにはグルカ兵自身の希望もあり、ブルネイでは小学校が統廃合され、英国軍人の子女と同じ環境で学習することになった。このように、グルカ兵はトランスナショナリズムを考察するうえできわめて興味深い事例を提供している。

なお、各執筆者のスタイルを尊重し、本報告書では記述やスタイルについての統一は最小限にとどめていることをことわっておきたい。

最後になったが、本特集に収められている論文はすべて平成15年度京都大学教育研究振興財団学術研究活動推進事業助成（共同研究）による『アジアの軍隊の歴史・人類学的研究——ジェンダー規範、地域社会、表象を中心に——』（田中雅一 代表）というプロジェクトの分担者と協力者による研究成果である。最後になったが同財団に感謝の意を表したい。

2004年3月